

特別活動及び総合的な学習の時間の基礎作り ～プライベート・コミュニティハウス「ふくちゃん家(ち)」の取組～

To Make a Basis of “Special Activities and The Period of Integrated Study”
The Effort Consists of the Private Community House “Fukuchan-Chi”.

小池 幸
MIYUKI KOIKE

はじめに

学校教育の中心的な役割の一つが、社会性やコミュニケーション能力の育成であることは論を待たない。しかし、時代とともに、「集う」機会や時間は減少し、本来児童生徒が意識的にも無意識的にも望む、「有機的な交流」は減少している。「教育の無機質化」、あるいは「教育のコモディティ化」と指摘もできる。そして、追い打ちをかけるようにコロナ禍において、あたかも人と人との接触は、あまり是としない風潮が自然に形成され、コロナ禍が過ぎた後も、一般化するのではないかという生活意識に危惧するところでもある。様々な思いがあると思うが、やはり、「集い」の素晴らしさは何物にも代えがたい生活原理として未来に繋げていきたい。

【活動の概要】

本取組は、生家の旧宅（母屋）を、乳児（保護者同伴）からお年寄りまでの全世代が気ままに集える場所（プライベート・コミュニティハウス）として全面改装するところからスタートし、現在までの活動の状況や特筆すべき成果（主に子供たちの変容）を、特別活動・総合的な探究の時間の基礎作りからの視点でまとめたものである。



【ふくちゃん家(ち) 全景】

1. 研究の方向性

1.1 メインテーマについて

周知の通り、特別活動及び総合的な学習の時間（高等学校では総合的な探究の時間）は、小学校（※）・中学校・高等学校の『教育課程』に位置付き（巻末資料参照）、指導体制は各校ごとに組まれるが、原則全ての担任が受け持つことが一般的である。

※小学校のみ、3年生からの実施である。

両科目の特徴は、もちろん指導目標に依拠するが、実際の活動目線でもとらえた場合、何と言っても活動・学習フィールドが広範囲であり、人的交流が同学年のみならず、全世代と関係するところに集約できるものととらえる。

そもそも論になるが、両科目についての教育的意義は、残念ではあるが児童生徒はもとより、大人たちも明確にとらえていない傾向が強いのが現実である。その理由として、短絡的ではあるが、国語や算数などの科目は、試験によって成績が判定されること。また、美術や保健体育などの科目は、技能獲得としてとらえ、児童生徒・大人たちに強く意識化されている。道徳においては、価値観の獲得という点で、日々の生活を通して無意識のうちに重要性と必要性を認識している割合が極めて高い。

翻って、特別活動・総合的な探究の時間の受け止め方の弱さは、ザックリととらえれば、短期間での成果がなかなか出にくい教育活動であるとともに、特に、教師サイドの両科目に対する指導意識の差が、教師間に大きく横たわっていることが指摘できる。また、両科目とも、幼児・児童期における量的な如何ともし難い生活体験の差が、充実した授業展開に結びつかないという状況にあるのも事実である。

しかしながら、混沌とした社会情勢下における極めて必要かつ不可欠な教育の営みは、人と人が織り成す豊かな関わりであることを誰もが指摘しており、これを引き受ける両科目への認知度との矛盾が大いにクローズアップされてくる。この現実を受け止め、児童生徒一人一人が素晴らしい自己実現を果たしうるベースとしての生活体験を急務ととらえ、両科目の土台を学校生活のみならず、家庭生活における活動・取組からも築いていこうとする実践研究である。

1.2 サブテーマについて

コミュニティハウスという文言から、私たちはどのようなイメージを持つであろうか。

それは、ハード的な面からは、公民館であったり活動センターであったり、おそらく、地方公共団体が設置した建物ととらえるであろう。また、活動の内容というソフト的な面からは、目的を持った講座や交流することを主軸においた無目的に近い活動など様々な展開ととらえるであろう。

公共施設としてのコミュニティハウスは、人員・予算・ルールなど当然決められた制度のもとで運営されているが、本取組のプライベート・コミュニティハウスは、あくまでも私が個人として運営するものであり、明文化された規約や規定は存在していない。都合が許せば、いつでも対応できる「集いの場所」として機能できるのである。

そして、前述した、人との関わりが薄れていく現状で、気の合った人たちが肩肘張らずに関わりを自然な形で満喫できる、そのような場所があってもよいのではないかと、という願いのもと具体化した社会貢献の一形態とも呼べよう。

このような中で、特に原体験を刻む幼児期・学童期において、学校生活ではなかなか味わえない自然な形での異年齢の活動を享受できる時間と空間は、小学校から高等学校まで続く、特別活動・総合的な学習の時間の土台を形成していくものととらえる。学校教育を補完する施設・活動として、また、日常の家庭生活を充実させる施設・活動としてのプライベート・コミュニティハウスの取組は極めて重要且つ効果的であるものとして弾力的な運営を心がけていく。

2. ふくちゃん家（ち）とは何か

■ネーミングは家族の趣味の一つである「ふくろう収集」から来ており、母屋の中には至る所にふくろうグッズが置かれている。ふくろうは、ふくちゃん家（ち）にとって、言わばシンボリックな存在である。

【ふくちゃん家（ち）の大前提】

- ふくちゃん家（ち）の取組を他者に強要するものでないこと。
- ふくちゃん家（ち）の取組は無理なく持続可能であること。

2.1 ふくちゃん家（ち）における活動のねらい

- ①集いの中から人間的触れ合いを深める。
- ②集いの中から生活の活力を養う。

何かをしなければならない、という使命感に駆られたものではなく、自由気ままに集い、自由気ままに遊んだりおしゃべりしたり食べたりと、集う皆さんそれぞれのニーズに応じた楽しみ方を創造していくことのできる時間と空間を、思いっきり楽しむことを掲げている。子供たちは子供たちの楽しみ方を、大人は大人の楽しみ方を、という具合である。

重要なことは、一人一人が心を解き放つことである。それにより、「様々なことを自然と受容できるようになる」ととらえる。

2.2 ふくちゃん家（ち）立ち上げまでの経緯と環境

私の生家は、今なお自然が多く残る埼玉県中央部の町に位置し、数は減少しているものの、裏山には様々な樹木や鳥類、昆虫などが生息し、現在も数十年前の原風景が留め置かれている場所でもある。

私の両親は家の南側に広がる水田で農業、特に稲作と桑畑をもとにした養蚕を生業にしていた。小学校当時は、6月に農繁休業という特別な休みが3日間設けられており、家の手伝いをする習わしがあった。また、5月になるとどこからともなくツバメがやって来て、我が家の中に巣を作った。わざわざ人間がいる家の中に、である。子供心に、「ツバメって人間と一緒に生活しているのだな。」と感じていたことを思い出す。ほとんどの生き物が人間を警戒し距離を取っているのに、何故か不思議な思いをしたことも脳裏に焼き付いている。このように、生家はどの農家にも見られるように広く、また、明治時代からの出で立ちを残していた。

今から12年前に母親が他界し、無人の母屋が取り残された。敷地内に新宅があるが故、あまりにも広い母屋の扱いは生活上の喫緊の課題となった。この時私は、公立小学校に勤務しており、前述した薄れゆく人間関係の進行に危機感を抱いていた。とともに、母屋を壊すにはその大きさ、また明治時代の古き良き建造物としての勿体なさも脳裏をよぎった。

私自身、特別活動や総合的な学習の時間に代表される「体験活動」の研究に多くの時間を割いていたこともあり、何とか社会貢献に役立てることはできないものか、ととらえていたことも根底にあった。

ちょうどこの時、娘夫婦が生家前に新居を建築した。孫が生まれ、動き

回る頃になると、屋外での遊び場所や活動場所は常時確保できるが、雨天時では確保できない現実に直面した。この時、孫の雨天体育館的活動場所として、母屋の大改造も未来への贈り物として価値ある位置付けになるのではないかと、という思いも急速に焦点化してきた。

時あたかも孫の入園が決まり、我が家は幼稚園生活へのシフトが必然となった。日本全国ほとんどの地域で、子供の数の減少は止められず、私の地区でも一層の減少が余儀なくされている。孫が通園する幼稚園では、園児数こそかなり多いものの、広範囲な地域から登園しているのが現状である。徒歩・園バス・自転車・自家用車で送迎に見られるように、園を離れれば地域での日常的な集いや活動は極めて厳しい現実が突きつけられている。このような状況下で、いわゆる“ママ友”間で、母子とも（乳児含む）気軽に集える場所の希望が話題の中心となっていく現実があった。そして、孫が置かれている現状を、孫だけの満足に終わらせることなく、多くの子供たちに享受させたいという願いが満ち、先祖が残してくれた母屋を取り壊さず、リフォーム（実際にはリノベーションに近い）をかけて未来に繋いでいくことが私を含め家族の中心的な思いとして帰結し、平成29年（2019年）5月より全面改装工事がスタートし、同年12月完成をみるに至った。

2.3 ふくちゃん家(ち)の仕様

敷地は約300坪、母屋（ふくちゃん家(ち)）の建坪は約50坪、木造平屋建て瓦葺き築約120年である。このため、基礎部分は今の建築基準法では到底考えられない状況であり、耐震性の向上と使い勝手の良さを両立させる必要があった。

- ① 外観→これまでの母屋に車椅子スロープを設置
- ② 内部→中心となる柱を太くし、柱の基礎をコンクリート打ちとした。
また、各部屋の障子や敷居を全て取り除き、40畳近いフローリングのワンフロアとした。
また、これまでの土間はコンクリート打ちとした。
リビングルーム1（バリアフリー対応）・キッチン・風呂・トイレ2箇所・土間（コンクリート打ち）
- ③ その他→敷地内には各種樹木や草花、畑があり、四季折々の自然が楽しめる。また、敷地の北側に所有の小高い山があり、こちら

も手つかずの自然を散策できさらに、南側には私有の水田と畑があり、田植えや芋掘り、野菜作りの体験も可能である。



【水田風景】

2.4 ふくちゃん家（ち）の主な設備

- 車椅子スロープ ○ピアノ ○ホワイトボード ○大型テーブル2台
- ベンチ2基 ○本棚 ○大型エアコン2台 大型ファンヒーター1台
- 照明器具（全てLEDへ） ○室内トレーニング機器 ○卓球台
- IHクッキングヒーター ○温水洗浄便座2台 ○格納押し入れ
- 幼児用遊具各種 など

なお、駐車場は数台あるが、不足する場合は別途数十台確保できるスペースを用意できる。

※本棚には、近隣の小学校・中学校で使用する教科書全学年分全てをそろえている。

※画用紙や習字の半紙などの紙類は、近所の関係施設から無料で提供してもらっている。

2.5 ふくちゃん家（ち）の利用に当たって

「赤ちゃん（乳児）からお年寄りまで」を合言葉にスタートしたふくちゃん家（ち）であるが、暗黙の了解として、「気持ちよく過ごすための一人一人のルール・マナー・エチケットの励行」を基本行動としている。いわゆる、掲示物としての5箇条訓などのようなものは存在しない。子供同士、大人同士、大人と子供で、自然な成り行きの中で社会通念を身に付け伸長していければ是なのである。

また、安全安心な活動にすべく、特に

- 身体的な事故防止（食物アレルギー事故など含む）
 - 人間関係のトラブル
- に配慮を要している。

そのため、利用の条件を

★「私の家族誰かの関係者に限る」こととしている。

このことは、公的なコミュニティハウスと大きく異なるところであるが、反面、プライベート・コミュニティハウスの位置付けとしては是認されるものととらえる。

さらに、勧誘や斡旋といった類の活動は行わないことを了解事項としている。

使用料は無料を原則としているが、参加者の気遣い（例えば光熱費など）に負担をかけるのではないかと、という視点から、任意の寄付としている。毎回毎回ということではなく、あくまでも一任であり、大人のみ100円硬貨でことたり得る妥当な範囲となっている。もちろん、昼食やクッキングパーティーなどに係る費用は参加者負担である。

ふくちゃん家(ち)と新宅はそれぞれに独立しているため、家族の通常の生活に制限をかけることがなく、参加者が気軽に利用できるメリットを実感できる。

3. ふくちゃん家(ち)における主な活動

本取組事例は、特別活動・総合的な探究の時間の基礎作りに焦点化しているため、幼児及び児童が中心となって行う活動を取り上げ、大人の活動は別の機会に報告する。

ふくちゃん家(ち)に集う子供たちは、ふくちゃん家(ち)周辺の徒歩で来るメンバーもいれば、保護者（ほぼ母親）が車で連れてくる場合も多い。むしろ、後者の方がかなりの割合を占め、娘の関係者が全員である。※現在、孫の長男は小学校2年生、次男は年中である。開所当時は、幼児関係が中心であったが、成長とともに、幼児から小学生の参加へと年齢層は拡大している。

前述したふくちゃん家(ち)の環境を想像し、以下子供たちの主な活動の様子をバーチャルに浮かべていただきたい。

① 自然体験活動

■「我ら探検隊」

裏山をそのフィールドとし、歩き回りを主としている。急な斜面があれば、落葉ふかふかな場所もある。自然の匂いを吸い込み、様々な樹木の手触り感を正に肌で感じ取る瞬間の連続である。お兄さんお姉さんは、妹や弟の手を引いて頂上を目指す。歌を歌う子もいれば立ち止まり、一心に気に入った光景に見入る子もいる。それでいて何となくグループとしての活動が成り立っているところが面白い。リーダーとメンバーが異年齢の集団で自然と構成される過程を、ストップモーションで見ているようでもある。

また、出合う樹木や昆虫などの生き物、果樹や野草などに興味を持ち、ふくちゃん家(ち)に備えてある図鑑でさらなる探究的な活動へと発展していくところも、これまたいとおかしである。

■「いもいも もっこり活動」

畑でのサツマイモ栽培活動である。通常イモ掘り体験は秋口に行われるが、いわゆるイモ掘りだけの活動である。ここでは、植え付けから収穫まで約半年間の取組が展開される。もちろん興味・関心のある子供たちだけの活動であるが、ほとんどの子供たちが希望するエネルギーは驚くものがある。子供たちみんな、生産活動を切望している。初夏の5月、苗のベッドを作るところから始まる。思い思いのベッドに苗を植え、日照りに枯れそうな我が苗を心配し、すくすくと成長する苗の姿に手応えと感動を覚えていく。最後は家族みんなで掘り起こし、いもいもパーティーで締めくくる。勤労の心と探究の心の両方が結実する瞬間でもある。



【サツマイモ収穫活動】

② 遊び体験活動

■「レッツ ピンポン」

キャプションの通り、屋内にある卓球台を使つての活動である。いつ何時でも可能なので人気は高い。この活動の利点は、異年齢の子供たちが、そのグループにあったルールを作り出していくところにある。最初からルールは存在していないのである。小学校のクラブ活動にも通じるところがある。また、一人一人の状況をつぶさに洞察し、その子に合ったルール作りをいとも簡単に進めてしまうという子供たちならではの柔軟な対応力を見せ付けられる一コマである。

■「読み聞かせ」

ふくちゃん家(ち)には絵本や紙芝居も置かれている。特筆すべきは、子供たちが子供たちに読み聞かせを自然発生的に行っていることにある。ここでも、読み聞かせの中心者がリードし、テーブルあるいはフロアに円形になり読み聞かせは進んでいく。読み終わった後、リーダーが感想を聞いたり印象に残っているところを身体表現させたりするなど思い思いのパフォーマンスが飛び出す。本好きの子供たちが生まれる瞬間でもある。また、絵本の絵は分かりやすいようにシンプルナイズされたものが多いので、子供たちが自由に絵本を自作する発展的な取組ともなる。総合的な学習の時間の探究課題「個々の興味・関心に依拠する課題」へとつながる取組の一場面でもある。

③ 学習体験活動

■「図鑑に夢中」

ふくちゃん家(ち)の活動の中では、実はこの学習体験の比率は小さい。教科書はそろっているが、学校で行われている国語や算数といった内容の活動はほとんどみられない。それもそのはずである。子供たちのニーズは、「集い、そして思い思いの活動に思い切り没頭したい!」のだから。ある意味、至極正常な状況(?)であると言っても過言ではなかろう。この中にあって、図鑑をもとに自己実現を図ろうとする子供たちは顕著である。聞き耳を立てれば、ある事象に対する子供ならではのうんちくが真顔で展開されている。根拠を図鑑に求め、論だてする姿は、総合的な学習の時間のベースとしても、大きな力となる。無意識のうちに備わる力こそ、本物の力となることを確信

する一コマでもある。

■「これは何？」

野に出る子供たちにとって、自然は学習の宝庫である。何を学ばなくてはならないのか、という制約がない中での子供たちは、無限の思考力を発揮する。例えば、春の七草に興味のある子は、延々とその課題解決に向け時を費やす。無意識の中の探究である。そして、課題がクリアされた後は、さらに課題を掘り下げるのかそれとも他の関連課題に拡大するのかがその子なりの意志決定となる。生態系を無意識に学ぶ子。環境問題と人間の生活を学ぶ子。農業生産活動に興味を示す子。みんな違ってみんないいのである。

④ ものづくり体験活動

この活動は、子供たちだけでは難しい（実際は無理）活動であるが、出発点は大人が子供たちの思いや願いを吸い上げる所から始まる。もちろん、時には大人が「○○作り」として指定しまうこともあるが。ふくちゃん家（ち）の活動の中でも、一番人気の一つである。

■「クッキングタイム」

ものづくり体験の中でも、やはり食べるものとなると誰もが納得の活動となる。クッキーを焼いたり、お餅を作ったり、パンを焼いたりとバリエーションは豊富である。この時の大人の関わりは、子供たちに何が必要か、あるいは、どのようなことに留意しなければならないかを意思決定させることである。この点については、関係する大人がわきまえており、子供たちの成長を見えない手で支えていく裏方の役割としてのポジショニングを自覚する、大人にとっても学ぶ場となっている。

子供たちは、この活動からルール遵守、マナー・エチケットの必要性、安全性、チームワークなど、様々な生活力を自然と吸収することになる。また、このことは、家での生活、学校での生活と往還関係を築くものとなる。

■「リース作り」

前述「いもいも もっこり活動」で育てたサツマイモは、イモ掘りの前につるを全て切り取らなくてはならない。この時出るのが芋づるである。つるはとても長く、また、切れにくいものとなっている。こ

の、自分たちで育てたサツマイモのつるを使って作るのがリースである。畑でつるを伸ばし、思い思いのところではさみをいれていく。ふくちゃん家(ち)に持ち帰った蔓(つる)は、その後お母さんの指導で見事なリースへと変身する。購入したものではなく、子供たちの愛情たっぷりのリースは、お土産となり、各自の家を飾ることになる。生命の起承転結を無意識のうちにもとらえる、原体験の一つになるものと確信する。

⑤ その他の体験活動

■私がJRC(赤十字)の活動に関係していることもあり、この活動は私からのお願いと成る。ズバリ募金活動である。埼玉県では幼稚園から高等学校までJRC活動に取り組んでいるところが多く見られる。小学校から高等学校までは児童会生徒会活動の一環として、義務ではないがJRC委員会も組織されている。相互扶助の精神を養うことにもつながり、日本赤十字社の全国的な募金活動時期とオーバーラップさせながら取り組んでいる。募金は1円から10円程度であり、社会活動の一環としての重要性を増している。募金はふくちゃん家(ち)に備えてある募金箱(貯金箱)に入れており、後日、日本赤十字社埼玉県支部に届けている。



【募金活動】

4. 成果と課題

4.1 成果

本取組はプライベート・コミュニティハウス「ふくちゃん家(ち)」における子供たちの様々な活動から、学校教育における『教育課程』の特別活動・

総合的な学習の時間の基礎作りの視点から展開している。もちろん、これは両科目だけの深化発展を想定したものではなく、直接的にも間接的にも全ての教育活動に関連してほしいという願いでもある。

現在5年目に入った。この間新型コロナウイルスの関係で休止に追い込まれる活動も多かったが、着実な成果を上げるに至っている。以下主な成果である。(特別活動・総合的な学習の時間に視点を当てている)

- 子供たちの表情・発言・行動から、「集い」の楽しさをどの子も実感している。
- 子供たちのコミュニケーションが無意識のうちに深化している。
- 幼児・児童の垣根を越えた結びつきの自然さが明確になってきている。
- 自己実現の素晴らしさや自己肯定感といった自分自身との向き合いができるようになってきている。
- 「自分とみんな」という個人と集団の関係性を、子供心にとらえられるようになってきている。
- 事象への情報収集から始まる探究過程のプロセスを、無意識のうちに獲得してきている。
- 知的好奇心や探究課題といった、事象に対する向き合い方がより焦点化してきている。
- 他者との協力・協働活動の重要性を認識してきている。

まとめれば、私たちが日頃とらえている抽象論の「自主性」「社会性」「道徳性」などの資質・能力が活動レベルで具体化(可視化)されてきた現実をとらえられるようになってきたとも表現できる。

4.2 課題

子供たちのこれまでの活動における課題はほとんど見当たらない。円滑且つ良好に展開されているが、利用に当たって、遠方地の子供が自分ではふくちゃん家(ち)に行くことができない状況もある。しかしながら、この内容は家族間あるいは近所の関係者で対応することになる。子供たちが云々できない内容である。

また、本稿で初めて登場する言葉であるが、スマホ・タブレットなどの電子機器の持ち込みである。成長とともに小学生や幼児の中にもスマホ・タブレットが普及し始めている。現時点では学年・年齢が低いこともあり係る懸念は見当たらないが、この後避けては通れない現実としてクローズ

アップしてくることは否めない。電子機器との共存共栄を図ることを基本方針とし、活動の前段階としての大人（保護者）レベルでの共通理解を図っておくことが重要ととらえる。電子機器にも、真正面から対応していくことが、ひいては子供たちの今後の活動に大きく寄与するものととらえることができる。

5. 今後の展開に向けて

まず1つ目は宿泊の採り入れである。現在は新型コロナウイルスの関係で対応を止めているが、終息にいたった暁には積極的に対応を図って行く予定である。この活動を通して、子供たち一人一人の個性をさらに開花させていく。

2つ目は中学生・高校生の受け入れである。現在は最上級生が小学生であり、中学生以上の参加はない。幼児から～高校生までの活動は理想としては可能と思われるが、現実として区分する必要性も生じることは想定内としてとらえておく。

あくまでも、

【ふくちゃん家（ち）の大前提】

- ふくちゃん家（ち）の取組を他者に強要するものでないこと。
 - ふくちゃん家（ち）の取組は無理なく持続可能であること。
- この2つを常に肝に銘じたい。

終わりに

いかに時代が進もうと、人と人の関わりの重要性は普遍である。集うことよさや可能性が衰退している現状を、私の置かれた現状の中で、無理なく改善していく一方策として取り組んだものが、このふくちゃん家（ち）であり、このことは未来を担う子供たちの社会性の育成に帰結する。今回は特別活動と総合的な学習の時間の時間からの視点で切れ込んでみたが、今後さらに掘り下げていくとともに、視点も変えて取り組んでいきたい。

参考文献

小学校学習指導要領（平成29年告示）・中学校学習指導要領（平成29年告示）・高等学校学習指導要領（平成30年告示）以上文部科学省

資料 『教育課程』における特別活動・総合的な学習の時間

| 義務教育 | | 義務教育外 |
|--|---|--|
| 小学校 ○令和2年度より全面实施 | 中学校 ○令和3年度より全面实施 | 高等学校 ○令和4年度より全面实施 |
| <p>第2章 各教科</p> <p>第1節 国語 (全学年) 第2節 社会 (3年以上) 第3節 算数 (全学年) 第4節 理科 (3年以上) 第5節 生活 (1・2年) 第6節 音楽 (全学年) 第7節 図画工作 (全学年) 第8節 家庭 (5・6年) 第9節 体育 (全学年) 第10節 外国語 (5・6年)</p> <p>※ 学習指導要領の改訂により、外国語は、令和2年度より新教科となる。英語という規定はないが、ほとんど英語を導入するものと予想される。</p> | <p>第2章 各教科</p> <p>第1節 国語 第2節 社会 第3節 数学科 第4節 理科 第5節 音楽 第6節 美術 第7節 保健体育 第8節 技術・家庭 第9節 外国語</p> <p>※ 新たな科目の設置はない。</p> | <p>第2章 各学科に共通する各教科</p> <p>第1節 国語 第2節 地理歴史 第3節 公民 第4節 数学 第5節 理科 第6節 保健体育 第7節 芸術 第8節 外国語 第9節 家庭 第10節 情報 第11節 理数</p> <p>※ 学習指導要領の改訂により、第11節理数は、令和4年度より新教科となる。</p> |
| | | <p>第3章 主として専門学科において開設される各教科</p> <p>第1節 農業 第2節 工業 第3節 商業 第4節 水産 第5節 家庭 第6節 看護 第7節 情報</p> <p>第8節 福祉 第9節 理教 第10節 体育 第11節 音楽 第12節 美術 第13節 英語</p> |
| <p>第3章 特別の教科 道徳 (全学年)</p> <p>※ 今までは副読本扱いであったが、検定教科書を使用</p> | <p>第3章 特別の教科 道徳 (全学年)</p> <p>※ 教科書について、小学校に準じる。</p> | |
| <p>第4章 外国語活動 (3・4年)</p> <p>※ 学習指導要領の改訂により、改訂前は5・6年の履修科目であったが、令和2年度より新たな履修科目として設置される。</p> | | |
| <p>第5章 総合的な学習の時間 (3年以上)</p> | <p>第4章 総合的な学習の時間 (全学年)</p> | <p>第4章 総合的な探究の時間 (全学年)</p> |
| <p>第6章 特別活動 (全学年)</p> <p>※ 授業として実施するのは、学級活動である。</p> | <p>第5章 特別活動 (全学年)</p> <p>※ 授業について、小学校に準じる。</p> | <p>第5章 特別活動 (全学年)</p> <p>※ 授業として実施するのは、LHR 活動である。</p> |